

茶園におけるチャノナガサビダニの発生消長

清水信孝・中村晋一郎・森山弘信・江上修一
(福岡県農業総合試験場八女分場)

Nobutaka SHIMIZU, Shinichirou NAKAMURA, Hironobu MORIYAMA and Shuichi EGAMI :
Activity of *Acaphylla theavagrans* KADONO in Tea Garden

チャノナガサビダニ *Acaphylla theavagrans* KADONO の茶園での発生が近年増加し、一部の茶園で一番茶摘採後に茶葉が萎縮、落葉するといった被害が確認されるようになった。そこで本害虫に対する防除技術の資料とするため、茶園におけるチャノナガサビダニの発生消長並びに新葉に対する寄生について調査したので、その結果の概要を報告する。

1. 材料および方法

1) チャノナガサビダニの年間発生消長

調査は福岡県農総試八女分場内の茶園 (品種 ‘やぶきた’) で行った。調査期間は1997年7月から1998年6月までとした。調査方法は、1~2週間間隔で古葉を100枚 (ただし、3葉期以上の場合は古葉と第3葉を50枚ずつ) 採取し、30倍視野の実体顕微鏡下で観察された葉裏中央に寄生するチャノナガサビダニ虫数を計測した。また、被害率も併せて調査した。

2) チャノナガサビダニの新葉に対する寄生

調査は1)と同じ茶園で1998年の一番茶期および二番茶期を対象に行った。調査方法は、各茶期の1葉期、2葉期、3葉期、4葉期にそれぞれ新芽を100本採取し、実体顕微鏡下で観察された葉裏全体に寄生するチャノナガサビダニ虫数を葉位別に調査した。

2. 結果および考察

1) チャノナガサビダニの年間発生消長

チャノナガサビダニの寄生虫数は、夏期は極めて少なく、9月頃から増加し始め、秋整枝後の10~12月にかけて秋期のピークを示した。しかし、そのピークは明瞭ではなく、被害葉も確認されなかった。1月以降、チャノナガサビダニの寄生虫数は低密度で推移するが、3月頃から再び増加し、一番茶開葉期~摘採後の4~5月にかけて春期のピークを示した。このピークは明瞭なものであり、一番茶摘採後に当たる5月上~中旬に寄生虫数が最も多く確認された。被害葉は5月中旬から6月上旬にかけて一番茶摘採残葉で確認された。その後、寄生虫数は急激に減少し、二番茶期に当たる6月は低密度で推移した (第1図)。

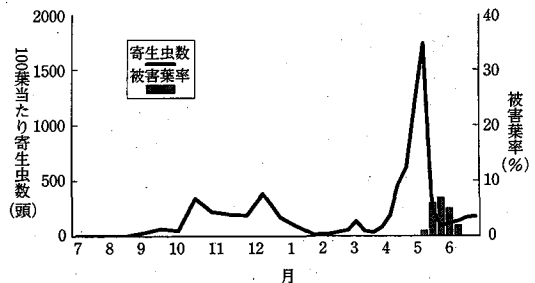
2) チャノナガサビダニの新芽に対する寄生

一番茶新葉に対するチャノナガサビダニの寄生は開葉初期から認められ、新芽の展開が進むにつれて寄生虫数も顕著に増加した。葉位別にみると上位葉よりも摘採面に近い下位葉への寄生が多かった (第2図)。

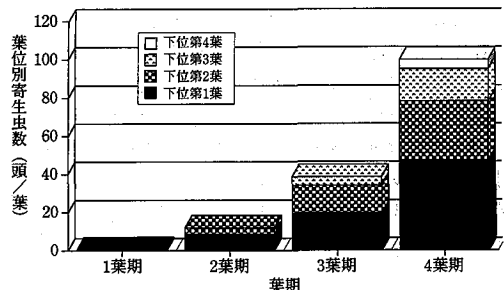
二番茶新葉に対するチャノナガサビダニの寄生も、一番茶新葉と同様に開葉初期から認められ、寄生部位も下

位葉に多い傾向を示した。しかし、寄生虫数の増加の程度は一番茶新葉と比較して緩慢であった (第3図)。

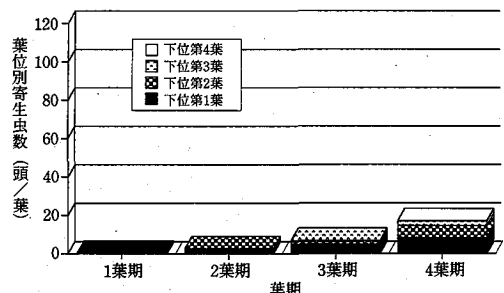
以上の結果から、一番茶摘採後にチャノナガサビダニによる被害が確認されるのは、摘採後も残葉として茶園に残存する一番茶下位葉にチャノナガサビダニが開葉初期から寄生し、そこで著しい虫数増加および加害を繰り返しているためであると推察された。



第1図 チャノナガサビダニの寄生虫数および被害率の推移



第2図 一番茶期における葉位別寄生虫数の推移



第3図 二番茶期における葉位別寄生虫数の推移